

1880-1890年代の日本における アメリカ女性医療宣教師の活動

藤本 大士

東京大学大学院総合文化研究科

受付：平成29年7月15日／受理：平成30年1月30日

要旨：1859年にアメリカから日本に最初の医療宣教師が来日し、医療を通じたキリスト教の普及活動がはじまった。日本における医療宣教は、主に、男性医療宣教師によっておこなわれていた。しかし、1880年代から90年代にかけて、女性医療宣教師もそれに関わるようになった。先行研究では、日本には既に多くの医師がいたため、日本における女性医療宣教師の活動は十分な成果をおさめることがなかったと指摘されてきた。それに対し、本論文は、先行研究で検討されていなかった女性医療宣教師の活動に注目し、彼女たちのなかには、ミッション・スクールで校医として働いたり、日本人支援者を得て診療所を開いたりすることで、一定程度の成果をおさめた者がいたことを指摘する。

キーワード：医療宣教師，女医，ミッション・スクール，女子医学教育

はじめに

南北戦争以降、アメリカのプロテスタント・ミッションでは、女性が主体的に宣教に関わることになる。それまでは、キリストの教えを広めようと志す女性たちは、宣教師である夫のサポートをおこなうなど、宣教の補助的な活動にしか従事することができなかった。しかし、1860年代頃より、ミッションのあいだで「女性による女性のための活動 Women's Work for Women」というスローガンが広まり、1880年代までに婦人伝道局などの専門団体が数多く設立された。このときに派遣された女性宣教師たちは、教師や医師などの専門職として働く自立した宣教師であり、独身の者が多かった¹⁾。

「女性による女性のための活動」というスローガンのもと、1870年代頃から多くの女性宣教師が来日するようになり、1880年代からは女性医療宣教師が来日するようになった²⁾。その活動内容は、宣教師や在留外国人の健康管理をおこない

ながら、医療提供を通じて、現地の人々に肉体的・霊的な癒しを提供することであった。間接的にキリスト教の教えを届けるこのような活動は、医療宣教と呼ばれた。医療宣教を通じてキリスト教に関心をもった人々は、各教派が開催する聖書研究会や礼拝に参加するようになり、なかにはキリスト教へ改宗する者もいた。医療を通じた宣教は、キリスト教による宣教への警戒心が強い地域においてはとくに大きな効果を発揮し、現地の人々の警戒心を緩める役割を果たした。

先行研究では、女性宣教師たちによる医師としての活動や医学教育より、彼女たちの看護婦としての活動や看護教育に関心が集中していた³⁾。たとえば、長老教会のリード(Mary E. Reade)が有志共立東京病院でおこなった看護教育や同教会のツルー(Maria T. True)がおこなった番町の看護学校(いわゆる桜井女学校附属看護婦養成所)については、亀山美知子や平尾真智子、芳賀佐和子らの研究がある⁴⁾。アメリカン・ボードによる京都看護婦学校やそこで看護婦をつとめたリチャー

ズ(Linda A. J. Richards)については、長門谷洋治や小野尚香らの研究がある⁵⁾。

一方、医師として活動した女性宣教師に関する研究は数少ない。小檜山ルイは長老教会のカミングス(Sarah K. Cummings)およびライト(Effie A. Light)について、石井紀子はアメリカン・ボードのホルブルック(Mary A. Holbrook)について研究している⁶⁾。小檜山・石井の議論の共通点として、当時のアメリカ社会やミッション内部における女性の地位向上などを踏まえ、女性医療宣教師の活動を分析した点があげられる。さらに、小檜山および石井は、カミングス、ライト、ホルブルックが医師として活動した期間が短かったこと、あるいは、医師資格をもちながら医師として活動していなかったことを理由にあげ、日本における女性医療宣教師の活動は大きな成果を残すことができなかつたと指摘している。事実、諸教派が日本に女性医療宣教師を派遣したのは、1880年代から1890年代に集中しており、8人の女性医療宣教師がその期間に活動していたものの、そのほとんどは1900年までに医療宣教師としての活動を中止している。

果たして、カミングス、ライト、ホルブルック以外の女性医療宣教師たちも十分な成果をおさめることはできなかったのであろうか。本論文は、日本において女性医療宣教師の活動が最も盛んであった1880年代から90年代の時期に注目し、その間に来日した8人の女性医療宣教師全員の活動を総合的に分析することで、その間に答えたい。具体的には、先行研究で論じられていたカミングス(1883年来日)、ライト(1887年来日)、ホルブルック(1889年来日)に加え、1883年来日したメソジスト監督教会のハミスファール(Florence N. Hamisfar)、1885年来日した婦人一致外国伝道協会のケルシー(Adaline D. H. Kelsey)、1886年来日したアメリカン・ボードのバックリー(Sara C. Buckley)、1891年来日したカンバーランド長老教会のゴールト(Mary A. Gault)、1893年来日したディサイプルス派のステーブンス(Nina A. Stevens)の8人である。このうち、カミングスとゴールトは来日後結婚し、それぞれ姓を

ポーターおよび菅沼と改めたが、本論文では来日時の姓に従って表記を統一している。

本論文の構成は以下の通りである。第1章は、女性医療宣教師来日の背景として、南北戦争以降、ミッションにおいて女性医療宣教師への期待が高まっていたことを確認する。第2章は、来日した女性医療宣教師の主な活動について紹介する。第3章は、先行研究を踏まえながら、女性医療宣教師たちが医療宣教を中止した理由を検討する。第4章は、一部の女性医療宣教師たちが医療宣教を中止するなか、医療宣教を継続した者に注目し、彼女たちが活動を継続できた理由を分析する。なお、本論文の中で史料の引用に際して、ミッションの年報や総会議事録などのタイトル中には回次や年次が記されることがあるが、引用の煩雑さを考慮し、回次・年次を略記している。

1 アメリカにおける女性医療宣教師の誕生

1.1 女子医学教育の広がりや女性宣教師の台頭

1849年にブラックウェル(Elizabeth Blackwell)が女性としてはじめて医学の学位を取得して以降、19世紀後半のアメリカでは女性が医学教育を受ける機会が増えていた⁷⁾。伝統的で、地位の高い医学校は依然として女性に門戸を閉ざしたままであったものの、一部の医学校は女子学生の入学を許可するようになっていたし、同時に、女子医学校が設立されはじめていた。

女子医学校の先駆は1848年にボストンに設立されたニューイングランド女子医科大学(New England Female Medical College)であり、同校は1873年にボストン大学医学校(Boston University School of Medicine)に吸収され、共学となった。女子医療宣教師との関連で重要なのが、1850年に設立されたペンシルバニア女子医科大学(Woman's Medical College of Pennsylvania)である。というのも、同校は最初の海外女性医療宣教師の出身校であり、その後も多くの女性医療宣教師を輩出したからである。共学の医学校のなかで、女性の入学に早くから積極的であったのがホメオパシー医学校である⁸⁾。実際、第2章でみるように、1880年代から1890年代に来日した女性医療宣教

師8人のうち3人（ハミスファー、ゴールト、スチーブンス）が医学校でホメオパシーを学んでいる⁹⁾。

同じ頃、プロテスタント・ミッションの間では、女性宣教師の活動が活発化していた。南北戦争以降、各教派は婦人伝道局を設立することによって、「女性による女性のための活動」を推し進めようとした。アメリカにおける最初の婦人伝道局は、1861年に設立された超教派の婦人一致外国伝道協会（Woman's Union Missionary Society of American for Heathen Lands, WUMS）である¹⁰⁾。その後、各教派は女性宣教師の派遣事業に関する部門を設けるようになる。主要なものとしては、1868年に会衆派教会、1869年にメソジスト監督教会、1870年に長老教会、1871年にバプテスト教会と聖公会、1875年にオランダ改革教会、1878年に南部メソジスト監督教会、1879年にメソジスト・プロテスタント教会、1881年にフレンド派がそれぞれ婦人伝道局を設立している¹¹⁾。

この時期に台頭した女性宣教師たちの特徴は、専門的な技能を有し、独身女性として宣教地で活躍した点である。とりわけ、教師や医療専門職などになることで、ミッションにおける女性の立場は自立的なものとなっていった。女性が教職を得ること自体は、南北戦争以前より進められていたが、南北戦争以降は、幼児・初等教育への進出が顕著になっていった。

1.2 ミッションにおける女性医療宣教師の活躍

女子医学教育の広がり、および、専門技能をもつ女性宣教師への期待は、女性医療宣教師という新たな役割を生み出すことになる。その最初の試みは、ヘイル（Sarah J. Hale）が1851年11月に設立したフィラデルフィア婦人医療宣教師協会（Ladies Medical Missionary Society of Philadelphia）である。同協会の目的は、異教徒の地に適格な若い女医を派遣することで、同地の女性たちを助けることであった。同協会設立後、ペンシルバニア女子医科大学の卒業生たちが医療宣教師となることを希望するも、彼女たちを派遣するミッションは見つからなかった¹²⁾。

女性医療宣教師を最初に海外に派遣したのがメソジスト監督教会婦人海外伝道局（Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, WFMS）である¹³⁾。1869年に設立されたWFMSは、ペンシルバニア女子医科大学を同年に卒業したばかりのスウェイン（Clara A. Swain）をインドに派遣した。彼女は1870年にインドに到着し、20年以上にわたってそこで医療宣教師として活動することになる。その後、WFMSはペンシルバニア女子医科大学を卒業したコーム（Lucinda Coombs）を1873年に中国に、シカゴ女子医科大学（Women's Medical College of Chicago）を卒業したハワード（Meta Howard）を1887年に朝鮮に派遣し、彼女らはそれぞれの国で最初の女性医療宣教師となった。

WFMSが先鞭をつけた女性医療宣教師の派遣は、他教派にも影響を与えていく。とくに、WFMSのグレイシー夫人（Mrs. J. T. Gracey）が著した『婦人海外伝道局の医療宣教——メソジスト監督教会』（*Medical Work of the Woman's Foreign Missionary Society: Methodist Episcopal Church*）という書籍が1881年に出版され、他教派の間でも女性医療宣教師への期待が高まっていった。長老教会系の*New York Evangelist*誌では、その書の刊行を受け、長老教会も同様に女性医療宣教師を派遣すべきだと主張されている¹⁴⁾。

ミッションは海外に派遣するための女性医療宣教師を確保するために、奨学生制度をつくるなどの施策をおこなった。一例をあげると、長老教会のフィラデルフィア婦人伝道局は、ペンシルバニア女子医科大学に入学する学生のために奨学生制度を1881年に開始し、女性医療宣教師を養成しようとした。1884年には同制度による最初の卒業生が輩出された。1895年までに23人の女性が同制度からの援助を受け、1895年時点で12人が海外で医療宣教師として活躍していたという¹⁵⁾。

同様に、女医を養成していた医学校側もまた、女子医学生の卒業後の進路として、医療宣教師という選択肢を重視するようになっていった。たとえば、ペンシルバニア女子医科大学のボドリー（Rachel Bodley）学部長は、1875年に女子医学生

に対するスピーチで、卒業後に医療宣教師として働く志願者を募っていた。それに応えるかのように、ポドリーが学部長をつとめた1874年から1888年の間は、他の時代より多くの卒業生が海外で医療宣教師として活躍した¹⁶⁾。

アメリカにおける女子医学教育の広がり、および、女性宣教師の台頭を背景として、1870年代から、WFMSをはじめとする多くの婦人伝道局が女性医療宣教師を海外に派遣するようになる。彼女たちが日本にやって来るようになるのは、1880年頃からであった。

2 日本における アメリカ女性医療宣教師の活動

2.1 日本における医療宣教師の活動

日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教は、1859年に長老教会のヘボン (James C. Hepburn) が来日にしたことによっではじまり、1870年代に大きな発展をとげた。医療宣教師たちは、基本的には、居留地内での医療活動しか許されていなかった。しかし、公私立の学校・病院から雇用された場合は、医療行為を居留地外でおこなうことができた。1870年代は、西洋医学を学んだ日本人医師がそれほど多くなかったため、日本人は外国人医師のもとを訪れたり、外国人医師を雇用したりすることで西洋医学を学ぼうとした。医療宣教師はそのような機会を利用し、日本人から雇用されることで、居留地外にいる日本人に宣教をおこなおうとした。たとえば、1872年にアメリカン・ボードの医療宣教師として来日したベリー (John C. Berry) は、岡山県立病院の顧問をつとめたり、私立の同志社病院の院長をつとめたりし、広域にわたって医療宣教を進めた¹⁷⁾。

しかし、1880年代になると医療宣教師も直接的な宣教、すなわち、教会の設立などの活動に集中するようになっていく。それと同時に、これまで男性のみによっておこなわれていた医療宣教に、女性も関わるのが期待されるようになっていく。その結果、1880年代から1890年代にかけて、女性による医療宣教が活発化する。男性医療宣教師と同様に、女性医療宣教師は居留地内外の診療

所で働いた。一方、男性医療宣教師と異なるのは、彼女たちのなかにはミッション・スクールで校医として働いた者がいた点であった。その背景には、日本で立ち後れている女子教育事業を目の当たりにした女性宣教師たちが、1870年以降、各地で女学校を設立していったことがあった¹⁸⁾。1870年にオランダ改革教会のキダー (Mary E. Kidder) が設立した「ミス・キダーの学校」を先駆として、その後、各教派はこぞって女学校を設立し、女性宣教師は教師としてそれに奉仕した¹⁹⁾。そのため、女性医療宣教師が来日しはじめた1880年代には、全国に多くの女学校が存在しており、女性医療宣教師たちはそこで校医として活動することが期待されたのである。

1880年代から1890年代にかけて来日した女性医療宣教師のうち、主にミッション・スクールの校医として活動したのが、ハミスファー、ケルシーであり、主に診療所・病院で活動したのが、カミングス、バックリー、スチーブンスであり、両方で活動したのがゴルトである。一方、この時期に来日した女性医療宣教師としては他にライトとホルブルックがいるが、ライトは医療宣教師として活動することが期待されながらもそうすることはできず、ホルブルックは医師資格をもつ女性宣教師として来日しながらも医療活動をおこなうことはほとんどなかった。そこで、本章では、ライトとホルブルック以外の6名の女性医療宣教師の経歴について、その来日順にみていきたい。

2.2 カミングス

カミングスはインディアナ州スパイスランド (Spiceland) に生まれ、1883年にシカゴ婦人病院医科大学 (Chicago Women's Hospital Medical College) からM.D.を取得した²⁰⁾。1883年秋、長老教会のシカゴ婦人伝道局 (Woman's Presbyterian Board of Missions of the Northwest) は、同局最初の女性医療宣教師として、カミングスを日本宣教に任命する²¹⁾。カミングスは1883年10月頃に来日し、1884年から金沢での医療宣教をおこなうことになる。

カミングスが来日した頃、長老教会による金沢における宣教は勢いづいていた。1879年に金沢

表 1880年代から1890年代にかけて来日したアメリカ女性医療宣教師一覧

名前	所属ミッション	在日期間	活動拠点	指導学生
カミングス	長老教会	1883-1900	金沢, 京都	菱川ヤス
ハミスファー	メソジスト監督教会	1883-1886	函館	
ケルシー	婦人一致外国伝道協会	1885-1891, 1898-1902	横浜	須藤かく, 阿部はな
バックリー	アメリカン・ボード	1886-1892	京都	
ライト	長老教会	1887-1888	東京	
ホルブルック	アメリカン・ボード	1889-1896, 1902-1910	神戸など	
ゴールト	カンバーランド長老教会	1891-1922	大阪, 長崎	井上トモ
スチープンス	ディサイプルス派	1892-1907	東京, 秋田	寺田やは, 佐藤くみ

注：休暇のために一時的に帰米した時期も在日期間に入れている。また、ケルシーやゴールトのように、医療宣教師としての活動を中止したあとも日本に留まった場合も在日期間に含めている。ケルシーは最初、婦人一致外国伝道協会の宣教師として来日したが、2度目の来日時は独立の宣教師であった。また、ゴールトはカンバーランド長老教会の宣教師を辞退したのち、長崎で独立の宣教師として活動していたものの、メソジスト監督教会と協力関係にあった。

で宣教が開始され、1881年には宣教師ウイン(Thomas C. Winn)を中心として金沢教会が設立されていた。さらに1885年には、金沢教会の信徒を分け、殿町教会(のち、金沢元町教会)が設立され、金沢教会をウインが、殿町教会を宣教師ポーター(James B. Porter)が主に担当することになる²²⁾。1882年には、金沢は医療宣教の有用な場所であり、また、女性宣教師が必要であると考えられていた²³⁾。そして、そのような仕事の適任者としてカミングスが金沢にやって来て、女性医療宣教師として活動することになる。なお、金沢にやってきたカミングスは、ポーター宣教師と知り合い、1884年に結婚している。

カミングスは自宅で医療宣教を開始し、多くの患者が来診するようになった²⁴⁾。1884年には、のべ846人の患者を診察している²⁵⁾。1885年は体調を崩しながらも、340人の患者を診察しており、カミングスの名が知れ渡ってきたために、その年は前年よりも往診が多くなったという²⁶⁾。カミングスは金沢での医療宣教を1887年までおこなった。その後、4.2でも述べるように、京都でも医療宣教をおこない、1900年にミッションを辞退し、帰国した。

2.3 ハミスファー

ハミスファーは1856年にカンザス州オスウィーゴ(Oswego)に生まれた。1877年にオハイオ・ウェズレアン女子大学(Ohio Wesleyan

Female College)からB.S.を授与され、のち、ボストン大学医学校に入学し、ホメオパシーを学び、1882年にM.D.を取得している。ハミスファーはメソジスト監督教会婦人海外伝道局(WFMS)から女性医療宣教師として日本宣教を命じられ、1883年12月頃に来日した。ハミスファーは主に、函館の遺愛女学校の校医として活動した²⁷⁾。遺愛女学校の前身は、WFMSのプリースト(Mary A. Priest)によって1881年につくられていた。同校は函館最初の女学校であり、1882年に文部省より正式に女学校の認可を受け、カロライン・ライト・メモリアル女学校として開校し、1885年には遺愛女学校と改称した²⁸⁾。

1.2で述べたように、WFMSはすべてのミッションのなかで、女性医療宣教師の派遣に最も熱心であった。函館に女学校が開設される前から、WFMS内では同地への女性医療宣教師の派遣が求められていた。実際、1879年の年次報告では、WFMSが函館に女性のための病院を設立すること、および医療宣教師を同地に派遣することが強く求められている²⁹⁾。1883年には、WFMSが最初の女性医療宣教師としてハミスファーを函館に派遣することを決定した。

ハミスファーは遺愛女学校の校医および同校附属の診療所の医師として精力的に活動する。1885年の報告によれば、彼女の1日は朝6時からの患者の診察によってはじまり、午前中の多くの時間は診療所での活動に費やされた。もちろん彼女は

教育・宗教活動もおろそかにせず、朝7時半から8時にかけては、遺愛女学校の児童たちと歌を歌ったり、祈祷の時間をもったりした。昼食後も1時間ほど患者の対応をし、午後は患者を往診したり、勉強をしたり、気晴らしをしたりして過ごした。こういった活動がひとびとに認知されるようになり、診療所はミッションの支援に頼らず自給できるようになっていった³⁰⁾。1886年の報告では、毎日児童の患者が5人、診療所への外来患者が17人ほどあったという³¹⁾。

1885年頃には、ハミスファーは函館に病院を設立することで、医療宣教をさらに推し進めようとした。この頃には診療所は自給できるようになっていたし、診療にかかる収支も安定していた。また、ハミスファーは函館師範学校の英語教員としても雇用されていたため、その給料を病院の資金に充てることもできた。そのような資金状況に加えて、函館県には県立の医療機関は函館病院しか存在しないこと、および、彼女を函館師範学校へと斡旋した函館県令・時任為基と友人関係にあることが、ハミスファーに病院設立を促すことになった³²⁾。しかし、そのような計画は実行に移されることはなかった。結局、ハミスファーは1886年にミッションを辞退し、帰国している。

2.4 ケルシー

ケルシーは1844年にニューヨーク州ウェストカムデン(West Camden)に生まれた³³⁾。1868年にマウント・ホリヨーク女子セミナリー(Mount Holyoke Female Seminary)を卒業し、2年間学校で教えたのち、1875年にニューヨーク医院女子医科大学(Woman's Medical College of New York Infirmary)を修了した。その後、1年間マウント・ホリヨーク病院で働き、1876年にはマウント・ホリヨーク女子セミナリーの校医兼生理学教員となり、1878年までその職を続けた。1878年10月、ケルシーは長老教会から中国・通州に医療宣教師として派遣され、1882年まで活動していた。

その後、ケルシーは婦人一致外国伝道協会(WUMS)の女性医療宣教師に任命され、横浜の共立女学校で活動する。共立女学校の前身は、

WUMSのプライン(Mary P. Pruyn)、ピアソン(Louis H. Pieson)、クロスビー(Julian N. Crosby)が1871年に横浜に設立したアメリカン・ミッション・ホームである。1872年には校名が日本婦女英学校となり、1875年には共立女学校へと改められた。1875年、共立女学校の総理プラインは同校に病院設立の提案をする。このときの提案はWUMSから却下されたものの、代わりにプラインらは校医の派遣を提案し、WUMSはケルシーの派遣を決定した³⁴⁾。

1885年12月に来日したケルシーは、共立女学校での校医の活動と各家庭への往診などをおこない、医療宣教を進めた。1887年12月1日から1年の間に、1456回の外来患者の治療と961回の往診での治療を行っている。同時に、トラクト・福音書・カードなどを3000部配布し、小冊子を日本語に翻訳し、宣教を進めた³⁵⁾。1890年には、横浜から四国まで行き、医療宣教をおこなっている。そのときは、各地で病者の診療をすると同時に、3000部の福音書、数千のトラクト・聖句のカードを、100以上の町村で配布している³⁶⁾。このような医療宣教を通じて、患者がキリスト教へ関心を持つようになった。1887年には、足を悪くした身寄りのない少年を治療したところ、彼がキリスト教に徐々に関心を持ち、ついには救いについての話を聞くためにケルシーの元に来るようになったという³⁷⁾。1891年、ケルシーはミッションを辞退し、アメリカに帰国した。その後、ケルシーは再来日を果たすが、そのことは4.2で述べたい。

2.5 バックリー

バックリーはサラ・クレグ(Sara Craig)として1858年にニューヨーク州チャーチビル(Churchville)に生まれた³⁸⁾。彼女はニューヨーク州立ジェネセオ師範学校(Geneseo State Normal School)を卒業し、のち、ミシガン大学医学校(University of Michigan Medical School)で学んだ。1884年に同校を卒業し、1884年から1885年にかけてデトロイト婦人病院・児童施設(Woman's Hospital and Infant's Home, Detroit)で研修医とし

て働き、その後、1885年から1886年にかけて、卒業研修としてイギリスなどで学んだ。この間の1885年に、同じミシガン大学卒業生のエドモンド・バックリー (Edmund Buckley) と結婚した。

バックリーは、アメリカン・ボードと協力関係にあったシカゴの婦人伝道局 (Woman's Board of Missions of the Interior) から、アメリカン・ボードの宣教師の夫とともに、1886年11月に来日した。アメリカン・ボードは京都で医療事業を1886年11月から開始しており、同志社病院および京都看病婦学校を1887年に設立した³⁹⁾。バックリーは、両施設で医師および教員として働きながら、医療宣教をおこなった。その主たる仕事は、同志社病院で週に3回の診療をおこなうことであり、主に婦人科と小児科を担当し、たまに眼科もおこなった。また、同志社病院の入院患者や外来患者に対し、夕方の祈祷や、日曜学校での指導をおこなった。京都看病婦学校では看護婦長リチャーズを手伝い、週に3回の講義をおこなっていた。同志社では週に1時間の化学講義をおこなっていた。それに加え、京都市から招待を受け、衛生に関する講演などをおこなうこともあったという⁴⁰⁾。周りからの信頼を集めていたバックリーであったが、1892年11月に夫とともに帰国している。

2.6 ゴールト

オハイオ州クリーブランド (Cleveland) 出身のゴールトは、1862年に生まれた⁴¹⁾。1883年にクリーブランド・ホメオパシー医科大学 (Cleveland Homeopathic Medical College) を卒業した。その後、ゴールトはカンバーランド長老教会婦人海外伝道局 (Woman's Board of Foreign Missions of the Cumberland Presbyterian Church, WBFM) から日本宣教を任命される。ゴールトは、1891年7月に来日すると、大阪のウエルミナ女学校の校医として活動を開始した。ウエルミナ女学校は、WBFMのドレナン (America M. Drennan) を中心として1884年に川口居留地内に設立されていた⁴²⁾。

ゴールトの活動は、カンバーランド長老教会の宣教師とウエルミナ女学校の生徒の健康管理、お

よび外来患者の診療であった。ゴールトは1891年7月から1892年1月までの間に、64のインフルエンザ、40の肺病、46の赤痢、113のその他の疾病の診断をおこなっている。ゴールトは、医療活動だけでなく、診療所内で聖書の授業をおこなったり、自宅で開催していたキリスト教共励会に若者を招いたり、日本人医師の診療所の待合室にトラクトを置いてもらったりした。ゴールトは、クリスチャンが希望に満ち、幸福な臨終を迎えているのに対し、クリスチャンでない者は活力が無く、無気力なまま臨終を迎えなければならないことを引き合いにだしながら、日本において、さらなる医療宣教の必要性を感じていた。彼女の医療宣教を通じてクリスチャンとなった者もあらわれた⁴³⁾。

1892年に結婚したゴールトは、WBFMを辞退し、夫とともに長崎市へと引越す。ゴールトは診療所・病院を開設し、患者たちに医療宣教をおこなった。長崎時代のゴールトは、特定のミッションと雇用関係にあったわけではなく、あくまで独立の医療宣教師として活動していたが、メソジスト監督教会婦人海外伝道局 (WFMS) とは協力関係を築いていた。ゴールトの診療所では、WFMSの女性宣教師による聖書研究会や、活水女学校の生徒による日曜学校が開催されていた。診療所での宣教活動によって、教会への参加者も増え、多くの改宗者が生まれたという⁴⁴⁾。活水女学校は、WFMSによって1879年に設立されており、ゴールトはその校医としても活動した。ゴールトがいつ頃活水女学校の校医となったかは不明であるものの、1912年5月まで校医として働いていた⁴⁵⁾。

2.7 スチーブンス

スチーブンスは、1866年にケンタッキー州ゲルマンタウン (Germantown) の近くに、ニナ・アズブリー (Nina M. Asbury) として生まれた。同州のオーガスタ大学 (Augusta College) を修了し、シカゴで薬学を学んだ後、クリーブランド・ホメオパシー病院大学 (Cleveland Homeopathic Hospital College) を1892年に修了した。1892年6

月にはディサイプルス派の牧師シェルマン・スチーブンス (Sherman E. Stevens) と結婚している。

スチーブンスは夫のシェルマンとともに、ディサイプルス派の外国クリスチャン伝道協会 (Foreign Christian Missionary Society, FCMS) の宣教師となり、1892年11月に来日した⁴⁶⁾。来日後、最初の3年間は、夫妻は東京・本郷で宣教をおこない、1894年には帝国大学の向かいの森川町に自費で教会堂をつくっている⁴⁷⁾。1895年には、ディサイプルス派の活動拠点であった秋田に異動し、夫婦で宣教を続けた。

スチーブンスは東京・秋田で医療宣教をおこなった。1893年から、東京で宣教師などの治療をおこないながら、日本人患者に対しても医療宣教をはじめた⁴⁸⁾。1895年に秋田に着任してからは、自宅で患者の診察をおこないながら、週に1回は看護婦のための授業をもっていた⁴⁹⁾。看護婦の授業では、病者の世話の仕方だけでなく、聖書についても教えた⁵⁰⁾。1896年には、診療所を開設し、さらに、1年間に200回以上の往診をしている。それに加え、宣教のための旅行に6週間を費やし、キリスト教に関する文献を配布してまわった⁵¹⁾。1887年には、毎日3時間を診療所での医療に費やしている。スチーブンスは、医療が外国人に対する人々の偏見をなくすのに有用で、集会への参加者増加につながっていると実感していた⁵²⁾。1899年には、約11ヶ月の間に2000人の患者を診察し、その患者たちに対し聖書のトラクトを配布したという⁵³⁾。スチーブンスはまた、日本人医師の助けを得て、中長町に診療所も開設している。彼女は名医であると評判になり、眼病やリュウマチの患者などが多く彼女を訪ねた⁵⁴⁾。1899年には休暇のため一時帰国したが、再来日後、医療宣教の中止を余儀なくされ、1907年に夫とともに帰国した。

3 医療宣教中止の理由

3.1 ミッション内部の対立

先行研究は、他国で活動した女性医療宣教師に比べると、来日した女性医療宣教師たちは十分な成果を残すことが出来なかったと結論づけてい

る。小檜山は長老教会のカミングスとライトを、石井はアメリカン・ボードのホルブルックを事例として、彼女たちが医療宣教を中止した理由を3つあげている。すなわち、ミッション内部の対立、日本人医師の多さ、日本人からの圧力である。では、同時期に来日した他の女性医療宣教師たちも、同様の困難に直面したのだろうか。

第一の理由であるミッション内部の問題に直面した事例として、小檜山の議論を参考に、ライトの日本での活動を確認したい⁵⁵⁾。ペンシルバニア州レバノン (Lebanon) 出身のライトは、長老教会のフィラデルフィア婦人伝道局から奨学金を受け、ペンシルバニア女子医科大学で医学を学び、1887年3月に卒業した⁵⁶⁾。同年6月20日には早くも日本宣教に任命され、10月に来日した。ちょうどフィラデルフィア婦人伝道局は、1886年12月から1887年1月の間に、ツルーが番町ではじめていた看護学校の責任者を欲していた⁵⁷⁾。そのため、その責任者として医師であったライトが選ばれたのである。しかし、ライトとツルーとのあいだの看護婦に対する考えの違いにより、ライトの日本での活動はわずか1年足らずで終わりを迎える。それに加え、看護学校自体に日本ミッションからの反発があった。東京にいる宣教師たちは、女性宣教師リードが既に有志共立東京病院で看護婦養成をおこなっており、それがツルーの活動と重なっているため、ツルーの看護教育は不必要であると考えた。このように、ミッション内部の意見の衝突により、ライトは医療宣教師としての活動をおこなうことができず、番町の女学生や看護学生に衛生学を教えることしかできなかった。結局、1888年12月に、ライトはフォールズ (Robert S. Falls) と結婚し、それに伴いミッションを辞退した。その後の彼女の動向は詳らかではない。

ライトと同様に、ミッションから医療宣教への理解が得られなかった例として、婦人一致外国伝道協会 (WUMS) のケルシーがあげられる。彼女は共立女学校での医療宣教をうまく進めていたものの、WUMS側の彼女に対する評価は決して良いものではなかった。そもそも、彼女が日本に

派遣されたとき、彼女に与えられた主たる業務は日本で診療所や病院を開くというよりむしろ、往診をしてまわるということであった。そのため、ケルシーが着任当初に医務室の設立をWUMS理事会に要望したとき、それは却下されていた⁵⁸⁾。その後、5年にわたって医療宣教を続けていたケルシーであったが、1890年11月頃にWUMS理事会がケルシーによる医療宣教の中止を決定し、翌年、ケルシーは帰国した⁵⁹⁾。

以上のように、女性医療宣教師を派遣していたミッション側にも、女性による医療宣教については意見の相違があった。つまり、女性医療宣教師とミッション本部の間だけでなく、婦人伝道局、日本にいる宣教師、女性宣教師の間など、さまざまな次元で意見の対立が存在していたのである。

3.2 日本人医師の多さ

女性医療宣教師が活動を中止した第二の理由として、日本には医師が多かったことがあげられる。たとえば、アメリカン・ボードから派遣されていたホルブルックはそれを理由に、日本で医療宣教をおこなわなかった⁶⁰⁾。ホルブルックは、アメリカン・ボードと協力関係にあったボストンの婦人伝道局 (Woman's Board of Missions) によって、北中国の通州に医療宣教師として派遣され、1881年から1887年まで同地で活躍した。その後、アメリカン・ボードから日本宣教を命じられ、1889年10月に来日する。中国では医療宣教師として活躍したホルブルックであったが、日本で医療宣教をおこなうことはほとんどなく、教育事業に集中した⁶¹⁾。その理由は、石井が指摘しているように、日本には多くの優れた医師がいるため、日本での医療宣教は有用でないとしてホルブルックが考えていたからである⁶²⁾。

メソジスト監督教会のハミスファーもまた、日本に医師が多すぎるために、医療宣教の意義を感じなかった。1883年に函館に来て以来、ハミスファーは順調に医療宣教を進めていたが、1886年になると、突如、日本での医療宣教の意義に疑問を投げかけるようになった。なぜなら、日本の病院および医師の数は十分であり、ほとんどアメ

リカのように医療が発展しつつあると考えるようになったからである。そのため、ハミスファーは、もし他に医療宣教をおこなうべき場所があれば、そちらに派遣してほしいとミッションに訴えている⁶³⁾。彼女は朝鮮での医療宣教を命じられたが、結局、同地には赴任せず、1886年9月に帰国している。

ホルブルックやハミスファーのような考えは、女性医療宣教師たちだけでなく、日本にいる他の宣教師の間でも共有されていた。アメリカン・ボードの女性医療宣教師バックリーの夫エドモンドは、日本での医療宣教の意義に懐疑的であった。彼の妻は女性医療宣教師として同志社病院と京都看病婦学校で活躍していたものの、日本での医療宣教は他国での医療宣教ほど成功が約束されているものではないと指摘する。その理由としてあげるのが、日本政府が帝国大学において近代的な医学カリキュラムを用いているからであるという⁶⁴⁾。

このように、日本に成熟した医師が一定数いたために、西洋医学の提供を通じて医療宣教をおこなおうとした女性医療宣教師たちのなかには、日本で活動を続けることに意義を感じなくなった者もいた。

3.3 日本人からの圧力

第三の理由として、女性医療宣教師に対する日本人からの圧力や妨害があげられる。たとえば、1887年4月頃、金沢市の役人が長老教会から派遣されていたカミングスに対し、日本政府の医術開業免状がないために、同地で診療をおこなうことはできないと通達した。カミングスは、突然、そのような通達を受けた理由に、日本人医師のクリスチャンや女性に対する嫌悪があると捉え、とくに女性に対する無理解があると嘆いている⁶⁵⁾。それに加え、自分が患者を多く獲得したため、その活動に日本人医師が圧力をかけはじめたともカミングスは考えていた。彼女が金沢に着任した当初、県の好意によって医療活動をおこなうことができたが、彼女の活動に対し、地元医師たちが嫉妬をするようになり、その活動を制限するよう県

に働きかけたとされる⁶⁶。こうしてカミングスは、3年間続けてきた金沢での医療宣教を終え、代わりに、同地における教育事業に関わるようになった⁶⁷。

ディサイプルス派から秋田に派遣されていたスチーブンスは、秋田警察署より活動の中止を命じられた。その理由は、診療所の責任者である医師・石田三隆が実際に診療をしておらず、スチーブンスのみが診療をしているのは、条約違反にあたるからであった⁶⁸。その後、彼女への処分は取り下げられ、医療宣教を再開することができたものの、条約改正に伴い、再び医療宣教の中止を余儀なくされた。なぜなら、1899年7月17日から効力が発生した日米通商航海条約下では、外国人医師もまた、医籍に登録しなくてはならなくなったからである。スチーブンスは当然医籍登録を試みたが、ホメオパシー医師であるために医師資格が認められなかったと嘆いている⁶⁹。そのため、医療宣教を中止し、代わりに同地で幼稚園事業をはじめた⁷⁰。

以上のように、小檜山および石井が事例として扱っていたカミングス、ライト、ホルブルックだけでなく、同時期に来日していたケルシー、ハミスマー、スチーブンスもまた、同様の理由により医療宣教を中止していたことがわかる。第一および第三の理由によって、多くの女性医療宣教師たちは自らの意志に反して、医療宣教の中止を余儀なくされた。それに対し、第二の理由をあげることで、自らの判断で医療宣教の中止をする女性医療宣教師もいた。

4 医療宣教を継続するには

4.1 日本人支援者たち

しかし、すべての女性医療宣教師たちが叙上の問題に直面し、医療宣教を中止したわけではなく、日本で医療宣教を続け、一定程度の成果を残した者もいた。以下では、なぜそれが可能となったのかを分析したい。

まず、そもそもの問題として、当時の外国人医師の条約上の立場について確認したい。外国人医師が、居留地内で診療活動をおこなうことは問題

がなかったものの、居留地外で活動をおこなうには日本人の身元引受人を探す必要があった⁷¹。そのため、居留地外のミッション・スクールの校医として活動した者は、その学校の日本人支援者が女性医療宣教師たちの身元引受人となっていたと思われる。それに対し、居留地外で開業するには、そういった身元引受人を得ることが難しく、そのために、金沢時代のカミングスのように、地元医師から妨害を受けることもあった。

日本人支援者を得ることの重要性は、秋田で活動していたスチーブンスの事例にもみてとれる。1898年1月、秋田警察署がスチーブンスの診療所の廃止を命じたことに対し、スチーブンスは以下のように回答する。彼女の東京時代の3年間および秋田に来て最初の1年間は、日本人医師の力を借りずに単独で医業を営んでいたものの、アメリカ公使館の指示により、単独で医業をおこなうのは好ましくなくないので、協働者として石田とともに医業を営んだというのである。彼女の主張を受け、秋田警察署は秋田県知事を通じて小村寿太郎外務次官に処遇について問い合わせる。小村は、確かに現行条例では外国人の居留地外の医業は禁止されているが、東京ではこれまで同様の行いが黙認されてきたこと、および、新条約実施も迫っているため今さらそれを問題視する必要がないことをあげ、スチーブンスの件も黙認してよいと回答している⁷²。

身元引受人を得る以外には、医籍に登録しなければ自由に開業をすることはできなかったが、条約改正前までは外国人は医籍に登録することができなかった。しかし、ゴールの場合は、菅沼元之助という日本人と結婚し、帰化したために、1893年8月に医籍登録をおこなうことができた。そのため彼女は、活水女学校の校医をつとめると同時に、長崎・十人町42番地で診療所を開いている⁷³。1896年6月には山手近くの十善寺中野平町36へと引っ越し、長崎婦人病院として女性や子どもを中心に診療をおこなった。新条約下では、ゴールは長崎市から市内在住の外国人に対して種痘をおこなうよう依頼されるなど、市から信頼を得るようになっていた⁷⁴。

このように、外国人の居留地外居住、および、医業に関する法規を守っていれば、女性医療宣教師は問題なく医業に従事することができたのである。

4.2 アシスタントとしての日本人女性

叙上のような問題もあり、女性医療宣教師たちは、日本での医療宣教を円滑におこなうためにも、日本人支援者を得ようとした。このときに彼女たちが考えたのが、日本人女性に医学知識・技能を与えることで、医療宣教の日本人アシスタントを育てることであった。当時の日本では女子医学教育がまだ十分に整備されていなかったこともあり、女性医療宣教師たちはミッション・スクールで出会った女学生を、アメリカの医学校に留学させた⁷⁵⁾。

長老教会のカミングスは、金沢時代に自宅の診療所で医学教育をおこなっていた⁷⁶⁾。このときに彼女から医学を学んだのが菱川ヤスである。彼女は共立女学校で学んだのち、有志共立東京病院で看護教育に従事していた長老教会の宣教師リードから、同教会のカミングスを紹介してもらっていた⁷⁷⁾。菱川は、カミングスに斡旋され、彼女の母校であるシカゴ婦人病院医科大学で学び、1890年にM.D.を取得し、シカゴの婦人病院などで数年間研修医として働いた⁷⁸⁾。

帰国後の菱川ヤスは、金沢から京都に移っていたカミングスの宣教活動を手伝った。2人は1892年10月20日に京都市の新町通上立売上るに、好生堂という診療所をはじめた⁷⁹⁾。カミングスと菱川による京都での医療活動は日に日に成長していき、1893年には1500人の患者を治療した。カミングスの夫ジェームスが語るように、京都における医療宣教は非常に重要であった。なぜなら、医療宣教による福音は間接的なものであるが、多くの人々に福音を容易に届けることができるからである⁸⁰⁾。しかし、1895年5月に菱川は体調を崩してしまい、その後、診療所は閉鎖を余儀なくされた⁸¹⁾。短い期間ながらも、カミングスと菱川の活動は盛況をきわめたと言える。その後、カミングスは夫を手伝いながら、1900年にミッションを

辞退し、帰国した。

婦人一致外国伝道協会のケルシーは共立女学校において学生に医学を教えた。1887年の記録には、ケルシーの医療活動を手伝ってくれている共立女学校の生徒について言及しており、彼女らにアメリカで医学の教科書としてよく用いられていたグレイ (Henry Gray) の『解剖学』とフリント (Austin Flint) の『生理学』を日本に送ってほしいとミッション本部に伝えている⁸²⁾。また、ケルシーが1891年に日本を離れるときに、須藤かくと阿部はなという学生2人をアメリカに連れて行き、彼女らを1893年にシンシナティのローラ記念女子医科大学 (Laura Memorial Woman's Medical College) に入学させ、医学を学ばせた⁸³⁾。

須藤と阿部は、1898年に、ケルシーとともに独立の医療宣教師として日本に戻った。彼女たちは横浜婦人慈善会病院で勤めながら、医療宣教をおこない、新たな信者も獲得していった⁸⁴⁾。しかし、同院における仏教徒の台頭により、病院内での医療宣教の継続が難しくなり、同院の辞職を余儀なくされた。その後、少しの間、彼女たちは横浜で診療所を開き、医療宣教を継続した⁸⁵⁾。しかし、1902年に3人はそろってアメリカに向かい、ケルシーの故郷に移住し、同地で医療と教会での活動に奉仕した。

ディサイプルス派のスチーブンスは秋田で医学教育をおこなっていた。1897年の年次報告によれば、スチーブンスは診療所で毎朝、寺田やほとと佐藤くみに医学を教えていた⁸⁶⁾。二人はともに、秋田教会の信徒であった。1899年7月にスチーブンスが一時休暇のためにアメリカに帰国する際、寺田と佐藤も彼女に同行し、彼女らはスチーブンスの母校であるクリーブランド・ホメオパシー医科大学 (Cleveland Homeopathic Medical College) (1897年にクリーブランド・ホメオパシー病院大学から改称) に入学した。寺田は途中で体調を崩し、1904年に帰国した一方、佐藤はレークサイド看護学校 (Lakeside Training School for Nurses) に移り、1905年に看護学を修了し、帰国した⁸⁷⁾。寺田・佐藤とともに、既に医療宣教を中止していたスチーブンスの宣教を手伝った。

メソジスト監督教会の支援を得て、活水女学校で校医をつとめていたゴールトも医学教育をおこなっている。ゴールトは、活水女学校で教員として働いていた井上トモに医学を2年間教え、その後、自らの母校であるクリーブランド・ホメオパシー医科大学に井上を留学させている⁸⁸⁾。井上は1898年に同校を修了し、その後、ミシガン大学医学校でも学び、1901年にM.D.を取得している。しかし、他の女子医学留学生とは異なり、日本に帰国後した井上は、師であるゴールトを助けることはなく、東京で開業し、校医として働いた⁸⁹⁾。

先行研究では、アメリカからやって来た女性宣教師たちが日本にもたらしたものとして、医療分野では看護教育が注目を集めてきた。しかし、女性宣教師たちは日本に看護教育だけでなく、女子医学教育ももたらしていた。彼女たちによる女子医学教育が医学史研究において見落とされていたのは、看護の場合とは異なり、女子医学教育機関など、制度として目に見える形でそれが現れなかったからであろう。実際、女性医療宣教師が医学教育機関を日本で設立することはなかった。アメリカ女性医療宣教師たちは、医学校をつくるのではなく、診療所で女性に個別に医学を教えること、あるいは、彼女たちにアメリカに医学留学する機会を与えることで、医学教育の機会に恵まれていない日本人女性たちに、その機会を与えたのであった。

4.3 医療宣教がまだまだ必要な場所

3.2でみたように、ハミスファーやホルブルックのように、日本に西洋医学を学んだ医師が多いために、西洋医学を通じた医療宣教は意味がないと考えた者もいた。しかし、女性医療宣教師のなかには、日本人医師の医学知識のなさを問題視した者もいた。たとえば、金沢時代のカミングスは、市の病院の日本人医師からチフス患者の治療の助けを求められた。彼はその病院の主任であったにもかかわらず、患者にモルヒネの皮下注射を2、3時間に1回おこなうなど、不適切な治療をおこない、その患者を死なせてしまった。カミングスは同様の症例を治癒したことがあったこともあ

り、日本人医師の能力や日本における医学教育に疑問を強く感じたのであった⁹⁰⁾。

患者の視点からみた場合も、日本に医療宣教は必要であると考えた女性医療宣教師もいた。大阪時代のゴールトは、呪術的な治療にまだとらわれている日本人の存在を指摘している。あるとき、ゴールトが校医をつとめていたウキルミナ女学校の生徒が肺炎を患った。その女学生は、最初、父親に連れられ、仏教の寺で呪術を受けさせられてしまった。しかし、ゴールトがその女学生を救い出し、治療したことにより回復したという。

長崎時代のゴールトは、日本における医療宣教の意義を強く感じるようになっていく。彼女は周囲から、日本には医療宣教は必要ないというのを何度も聞かされていたが、貧者に対する医療宣教には意義があると信じていた⁹¹⁾。まず、ゴールトは貧困層の女性や子どもに対する医療宣教を進めた。1900年頃からは、貧困層の精神病患者の問題に関心を向け始める。なぜなら、日本には精神病院が東京・大阪・京都に官立・私立のものがいくつもある程度で、精神病患者が十分に治療を受ける機会がないと考えたからである。彼女のもとに来る多くの患者は既に他の病院で治療不可能とされて来た者が多いため、ゴールトにも助けることができない患者が多いと言う。しかし、ゴールトの処方したホメオパシー薬が、精神病患者に対してまじまないようにして効いていることをゴールトは実感していた⁹²⁾。彼女は1922年まで日本で独立の医療宣教師として活躍し、1922年3月に帰米した。

他の医療宣教師が、医師が多くいる日本では医療宣教は必要でないとするなか、カミングスやゴールトのように、日本のなかでも医療宣教がまだまだ求められている場所があると考えた者もいた。

結 論

19世紀後半、とくに南北戦争以降のアメリカのプロテスタント・ミッションにおいて女性医療宣教師への期待が高まった。日本では、1870年代頃より、女性宣教師によるミッション・スクー

ルでの活動が増加し、1880年代頃より、そこで校医として働く女性医療宣教師が来日するようになった。校医として働く以外にも、それぞれの赴任地で開業医として活動する者もあり、彼女たちは医療宣教を通じてキリスト教の宣教につとめた。

小檜山や石井などの先行研究が指摘していたように、来日した女性医療宣教師たちは、主に以下の3つの理由により医療宣教を中止した。第一に、女性医療宣教師たちがミッション内部での協力を十分に得られなかったからである。ライトやケルシーはそれを理由に医療宣教を中止せざるをえなかった。第二に、日本には医師が多いため、医療宣教の意義がないと考えられたからである。ホルブルックやハミスファーはこれを理由に医療宣教を中止した。第三に、日本人から女性医療宣教師の診療活動に対して圧力があつたからである。カミングスは金沢で、スチーブンスは秋田で、その診療行為が不法であると咎められ、医療宣教の中止を余儀なくされた。このように、先行研究で検討されたカミングス、ライト、ホルブルック以外にも、同様の問題に直面した女性医療宣教師がいたことを本論文は指摘した。

しかし、先行研究が着目していた女性医療宣教師たちは、短期間で活動を終えた者ばかりであるため、それに基づき、来日した女性医療宣教師の評価をおこなうことは適当ではない。同時代に来日した他の女性医療宣教師のなかには、彼女らが様々な困難に直面しながらも、医療宣教を継続した者もいた。本論文は、その理由として2つを指摘した。

第一に、彼女たちが日本人の支援を得たことである。スチーブンスは、医師・石田三隆の助けを得て、秋田市内で診療所を開くことができたし、ゴールトは、夫が日本人であったために、長崎での活動をスムーズにおこなうことができた。女性医療宣教師のなかには、ミッション・スクールで出会った女子学生に医学教育を受けさせ、彼女たちに自らのアシスタントとして活動してもらうことを期待した者もいた。カミングスは菱川ヤスを、ケルシーは須藤かく・阿部はなを、ゴールト

は井上トモを、スチーブンスは寺田やほ・佐藤くみをアメリカの医学校に留学させた。女子学生たちは帰国後、井上を除き、女性医療宣教師たちを大いに助けた。なかでもカミングスは、金沢時代は地元医師から反発を受け医療宣教を中止していたが、京都時代は菱川の助けを得ることができたため、診療所での医療宣教を成功させることができた。

第二に、医療宣教の新たな意義を提示することであった。確かに、ホルブルックやハミスファーは、日本には医学をよく学んだ医師が多くいるために、日本での医療宣教は必要ないと考えていた。一方、カミングスやゴールトのように、日本の医師はいまだ十分に西洋医学を学んでいないし、患者は西洋医学の恩恵を受けていないと考える者もいた。とくに、女性や子どもの患者や、貧困層の患者、精神病患者などに注目し、彼らに対する医療宣教はいまだ十分でないと訴え、日本において医療宣教を継続する必要性を主張した。以上の分析を通じ、本論文は、1880年代から1890年代にかけて来日した女性医療宣教師の成果を明らかにした。

注

- 1) アメリカ女性宣教師の活動の歴史については、Dana Robert. *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice*. Macon: Mercer University Press; 1997などを参照せよ。
- 2) 本論文では、英語で *medical missionary* あるいは *missionary physician* と呼ばれる、医師資格をもつ宣教師を便宜的に医療宣教師と呼ぶことにする。ただし、医療宣教師が全員、宣教地において医師として活動していたわけではない。按手札を受けていた医療宣教師は、聖職者としての宣教活動を自らの活動の中心とし、医師としての活動は補助的におこなうことが多かった。逆に、按手札を受けていない医療宣教師は、人々に洗礼を授けることができないため、原則、医師として活動した。女性の場合は、按手札を受けることができなかったため、女性医療宣教師は、基本的には、医師として活動しようとした。しかし、本論文でも論じるように、女性医療宣教師のなかには、医師としての活動をおこなわず、一女性宣教師としての活動に終始する者もいた。
- 3) 看護婦資格をもつ女性宣教師は、宣教看護婦 (*missionary nurse*) とも呼ばれた。

- 4) 亀山美知子. 女たちの約束—M・T・ツルーと日本最初の看護婦学校. 京都: 人文書院; 1990年, 平尾真智子. 日本における看護婦養成の開始とアメリカ女性宣教師の役割—リード・ツルー・リチャーズの活動を中心にして. 山梨県立看護大学紀要 1999; 1(1): 17-27, Machiko Hirao, Sawako Haga, Rui Kohiyama. M. E. Reade: The Pioneering Educator of Nurses in Meiji Japan. *Jikeikai Medical Journal* 2010; 57(4): 113-119, 芳賀佐和子, 住吉蝶子. 有志共立東京病院看護婦教育所—最初の看護指導者ミス・リードの生涯. *東京慈恵会医科大学雑誌* 2016; 131(2): 49-58などを参照せよ.
- 5) 京都看病婦学校と同志社病院. 同志社社史史料編集所編. 同志社百年史 通史編 1. 京都: 同志社; 1979. p. 288-318 (執筆者は長門谷洋治), 小野尚香. 病と看護の視座—リンダ・リチャーズの人と思想 | リンダ・リチャーズの時代. *保健婦雑誌* 1997; 53(1): 66-69 (同誌に12回にわたって連載).
- 6) 小檜山ルイ. アメリカ婦人宣教師—来日の背景とその影響. 東京: 東京大学出版会; 1992, 石井紀子. アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道—メアリー・アナ・ホルブルックの場合 (1881年~1907年). *日本研究* 2005; 30: 167-191.
- 7) 19世紀の女子医学教育については, Ruth J. Abram, editor. *Send Us A Lady Physician: Women Doctors in America, 1835-1920*. New York: Norton; 1985, 篠田靖子. 一九世紀の医学教育と女医たち—西部の女医オーウェンズニアディアの場合. アメリカ西部の女性史. 東京: 明石書店; 1999などを参照せよ.
- 8) 女子医科大学と医学校の共学化については, Mary Roth Walsh. "Doctors Wanted: No Women Need Apply": Sexual Barriers in the Medical Profession, 1835-1975. New Haven: Yale University Press; 1977を参照せよ.
- 9) 19世紀後半のアメリカでは, 正規医学に対抗するセクト医学の台頭が目立ち, その1つがホメオパシーであった. ホメオパシーの医学校の修了者は, 正規医学の医学学校の修了者同様に, M.D.を取得することができ, 開業することができた. アメリカにおけるホメオパシーの歴史については, Martin Kaufman. *Homeopathy in America: The Rise and Fall of a Medical Heresy*. Baltimore: Johns Hopkins Press; 1971を参照せよ.
- 10) WUMSの初期の活動については, 安部純子. WUMS—アメリカ女性外国伝道のパイオニア. メアリー・P・ブライン著, 安部純子訳著. ヨコハマの女性宣教師—メアリー・P・ブラインと「グランドママの手紙」. 東京: EXP; 2000. p. 272-286を参照せよ.
- 11) 小檜山. アメリカ婦人宣教師. p. 21.
- 12) J. T. Gracey. *Medical Work of the Woman's Foreign Missionary Society: Methodist Episcopal Church*. Danville, N.Y.: A. O. Bunnell; 1881. p. 29-30.
- 13) WFMSの活動およびその医療宣教については, Robert. Ch. 4 "Woman's Work for Woman" and the Methodist Episcopal Church. *American Women in Mission* を参照せよ.
- 14) *A Call for Female Medical Missionaries*. New York Evangelist. June 23, 1881: 8.
- 15) 小檜山. アメリカ婦人宣教師. p. 107-108.
- 16) Gulielma Fell Alsop. *History of the Woman's Medical College, Philadelphia, Pennsylvania, 1850-1950*. Philadelphia: J. B. Lippincott Company; 1950. p. 135-139.
- 17) ベリーの活動については, 田中智子. 近代日本高等教育体制の黎明—交錯する地域と国とキリスト教界. 京都: 思文閣出版; 2012を参照せよ.
- 18) 日本のミッション・スクールによる女子教育の歴史については, キリスト教史学会編. 近代日本のキリスト教と女子教育. 東京: 教文館; 2016などを参照せよ.
- 19) この頃に設立されたミッション・スクールは, 土肥昭夫. *日本プロテスタント・キリスト教史*. 第4版. 東京: 新教出版社; 1987 [初版, 1980]. p. 77-80に詳しい.
- 20) Eliza H. Root. *Missionary Workers*. In: *Woman's Medical School, Northwestern University (Woman's Medical College of Chicago)*. Chicago: H. G. Cutler; 1896. p. 146.
- 21) 長老教会には1870年頃に, フィラデルフィアの婦人伝道局 (Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church), ニューヨークの婦人伝道局 (Ladies' Board of Missions, Presbyterian Church, New York), シカゴの婦人伝道局が別個に設立されていた. 長老教会における各婦人伝道局の特徴や, それぞれの間での対立については, 小檜山. 第2章 兵站—婦人伝道局. *アメリカ婦人宣教師*. を参照せよ.
- 22) 長老教会による金沢での宣教については, 日本基督教団金沢教会百年史編纂委員会編. *金沢教会百年史*. 金沢: 日本基督教団金沢教会長老会; 1981. p. 1-16を参照せよ.
- 23) Mrs. Thomas C. Winn. *Japan. Woman's Work for Woman* 1882; 12(7): 229. 以下, 同誌をWWWと略記.
- 24) Mrs. Porter. *Japan. WWW* 1885; 15(2): 58.
- 25) *Annual Report of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America* 1885: 126. 以下, 同誌をAR-PCと略記.
- 26) AR-PC 1886: 146.
- 27) Edward T. Nelson, editor. *Alumni Record of the Ohio Wesleyan University, 1842-1880*. Delaware, Ohio: The University; 1880. p. 70, Boston University School of Medicine Ninth Annual Announcement and Catalogue 1882: 23, 25.
- 28) メソジスト監督教会は1873年に日本宣教を開始し, 1874年から函館での宣教を開始していた. WFMSは

- 1874年に日本宣教を開始し、1878年に函館での宣教を開始している。遺愛女学校については、遺愛百年史編集委員会編。遺愛百年史。函館：遺愛学院；1987を参照せよ。
- 29) Annual Report of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church 1879: 22. 以下、同誌をAR-WFMSと略記。
- 30) AR-WFMS 1885: 41.
- 31) AR-WFMS 1886: 41.
- 32) AR-WFMS 1885: 42-43, 函館市編。函館市史 通説編, 第2巻, 函館市；1990. p.1282-1283.
- 33) ケルシーについては、「横浜共立学園120年の歩み」編集委員会編。横浜共立学園120年のあゆみ。横浜：横浜共立学園。1991；p.76-80, 保村和良。明治期にアメリカへ渡った本県出身の女性医師——須藤カクと2人の共働者Dr.ケルシーと阿部ハナ。東北女子大学・東北女子短期大学紀要2013；51: 147-150, 安部純子。女性宣教師Dr.アダリーンD.H.ケルシー。横浜プロテスタント史研究会報2015；57: 3-5なども参照せよ。
- 34) WUMS 理事会議事録。1885年4月8日付。「横浜共立学園資料集」編集委員会編。横浜共立学園資料集。横浜：横浜共立学園；2004. p.51-52.
- 35) Annual Report of the Woman's Union Missionary Society of American for Heathen Lands for 1888: 17 (横浜共立学園資料集. p.119-122). 以下、同誌をAR-WUMSと略記。
- 36) AR-WUMS for 1890: 20-21 (横浜共立学園資料集. p.125-127).
- 37) AR-WUMS for 1887: 21 (横浜共立学園資料集. p.118-119).
- 38) Who's Who in the Alumni University. Michigan Alumnus 1935; 41(15): 258.
- 39) 京都看病婦学校と同志社病院。同志社百年史 通史編1. p.315.
- 40) The First Annual Report of the Dōshisha Hospital and Training School for Nurses, in connection with the A.B.C.F.M. Mission 1887: p.8.
- 41) ゴールトについては、Lane R. Eams. The American Medical Presence in Nagasaki, 1858-1922. Crossroads: A Journal of Nagasaki History and Culture 1997; 5: 33-45, 長門谷洋治。フォールズ, ラニング, コルバン, ヘルとホイットニー——来日宣教師(2) 多彩なプロテスタントの医師群像。宗田一, 長門谷洋治, 蒲原宏, 石田純郎編。医学近代化と来日外国人。大阪：世界保健通信社；1988. p.144-145なども参照せよ。
- 42) カンバーランド長老教会は1876年にJ.B.ヘール(John B. Hail)夫妻を、1877年にA.D.ヘール(Alexander D. Hail)夫妻を派遣し、日本宣教を開始した。A.D.ヘールが婦人伝道局の設立を提案したことを受け、カンバーランド長老教会は1880年にWBFMを設立し、1881年に最初の女性宣教師を大阪に派遣した。詳しくは、B.W.McDonnold. History of the Cumberland Presbyterian Church. Nashville, TN: Board of Publication of Cumberland Presbyterian Church; 1888. p.482-495などを参照せよ。
- 43) Minutes of the General Assembly of the Cumberland Presbyterian Church 1892: 91. ゴールトは診療活動に加え、女性宣教師がおこなうような教育活動にも従事した。たとえばゴールトは、診療所内では裁縫・編み物・音楽を教え、ウキルミナ女学校では生理学・衛生の授業を受け持っていたという。
- 44) AR-WFMS 1895: 57, AR-WFMS 1896: 66, AR-WFMS 1897: 74.
- 45) 活水学院百年史編集委員会編。活水学院百年史。長崎：活水学院；1980. p.109.
- 46) ディサイプルス派は1883年に日本宣教を開始した。他の教派が居留地を中心として宣教をおこなったのに対し、ディサイプルス派はその活動拠点を秋田に定めた。1888年には秋田市本町4丁目に教会(のち秋田高陽教会と呼ばれる)を設立している。詳しくは、秋山操編。基督教会(ディサイプルス)史。東京：基督教会史刊行委員会；1973, 日本基督教団秋田高陽教会編。秋田高陽教会百年史。秋田：日本基督教団秋田高陽教会；1989などを参照せよ。
- 47) 秋山。基督教会(ディサイプルス)史. p.417.
- 48) Missionary Intelligencer 1893; 6(10): 290, Missionary Intelligencer 1894; 7(11): 375.
- 49) Missionary Intelligencer 1895; 8(11): 282.
- 50) Missionary Intelligencer 1896; 9(6): 126.
- 51) Missionary Intelligencer 1896; 9(11): 258.
- 52) Missionary Intelligencer 1897; 10(11): 250.
- 53) Missionary Intelligencer 1899; 12(11): 252.
- 54) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B11090390000, 2. 秋田県民江畑久蔵雇米国人ステープン妻石田三隆ノ名義ヲ籍リ同市ニ於テ医業開始ノ件 明治三十一年。内地ニ於テ外国人ニ其名ヲ貸シ土地ヲ所有セシメ或ハ商業ヲ営マシムル日本人処分一件(3-3-10-1)。1897年12月~1898年2月(外務省外交史料館所蔵)。
- 55) 小檜山。アメリカ婦人宣教師. p.212-228.
- 56) Annual Announcement of the Woman's Medical College of Pennsylvania, Sessions of 1885-1886. Philadelphia: Jas. B. Rogers Printing Company; 1885. p.23.
- 57) Annual Report of the Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church 1887; 17: 21.
- 58) WUMS 理事会議事録。1886年7月14日付。横浜共立学園資料集. p.53.
- 59) WUMS 理事会議事録。1890年4月9日付。横浜共立学園資料集. p.57, WUMS 理事会議事録。1890年11月12日付。横浜共立学園資料集. p.58-59.
- 60) ホルブルックは1854年にマサチューセッツ州ロッ

- クランド (Rockland) に生まれ、1878年にマウント・ホリヨーク女子セミナーを修了した。1880年にはミシガン大学医学部でM.D.を取得し、半年間、ニューイングランド婦人・小児病院 (New England Hospital for Women and Children) で研修をおこなった。石井。アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道。p.169-170。
- 61) ホルブルックは、来日前から、彼女の母校のマウント・ホリヨークのような学校を日本につくことを目指していた。来日後、まずは岡山と鳥取で1年ずつ活動し、1891年12月から神戸英和女学校 (1894年、神戸女学院に改称) に教師として着任した。同校では、医学という自らの専門知識を活かし、家庭衛生学を講じることで、女生徒たちにクリスチャン・ホームの論理を学ばせようとしたのである。石井。アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道。p.178-185。なお、ホルブルックは同志社病院で短期間ではあったが働いていたようである。京都看病婦学校と同志社病院。同志社百年史 通史編1。p.315。
- 62) 石井。アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道。p.186。
- 63) AR-WFMS 1886: 41。
- 64) Edmund Buckley. Letter From Japan. Monthly Bulletin: A Journal of the Students' Christian Association of the University of Michigan 1887; 8(9): 163-164。
- 65) Letters from the Front: Japan. Woman's Work for Woman and Our Mission Field 1887; 2(9): 240。以下、同誌をWWW-OMFと略記。
- 66) Root. Missionary Workers. p.145-146。
- 67) 当時の金沢には長老教会の宣教師たちが設立した、男子中学校の愛真学校 (1882年設立)、金沢女子学校 (1884年に前身の私塾開学) があった。カミングスは、それらの学校や幼稚園で授業を受け持ち、裁縫などを教えた。Letters from the Front: Japan. WWW-OMF 1887; 2(9): 240, Letters from the Front: Japan. WWW-OMF 1888; 3(12): 326。
- 68) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B11090390000, 2. 秋田県民江畑久蔵雇米国人ステープン妻石田三隆ノ名義ヲ籍リ同市ニ於テ医業開始ノ件 明治三十一年。
- 69) Missionary Intelligencer 1902; 15(11): 328。なお、1900年時点では、小村寿太郎駐米公使が、アメリカの医学校でホメオパシーを学んだ者も他の医師資格と同等であるということを認めていた (JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12082201400, 6. 米国医師ノ資格其他ニ関スル事項取調方内務省ヨリ依頼ノ件 明治三十二年十月。外国医学校医術開業免状下付及医業制度等ニ関スル事項取調方内務省ヨリ依頼雑件 (B-3-11-1-12)。1899年10月~1900年1月 (外務省外交史料館所蔵))。しかし、1901年12月には内務省の中央衛生会がアメリカ国務省に対し、1899年7月以降、日本でホメオパシーの実践が認められなくなったと通達している (Notes. Consular Reports: Commerce, Manufactures, Etc 1902; 68(258): 450)。
- 70) 1905年1月、ステープンスは秋田幼稚園を中長町 (秋田高陽教会隣の宣教師会館内) に設立し、初代園長となる。同園は県下で最初の幼稚園であり、1906年には県から正式な認可を受けている。その後、体調を崩し、1907年に夫妻で帰米した。秋山。基督教会 (ディサイプルス) 史。p.44。
- 71) 外国人の居留地外居住については、梅溪昇。お雇い外国人の研究。上巻。東京: 青史出版; 2010。p.111を参照せよ。
- 72) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B11090390000, 2. 秋田県民江畑久蔵雇米国人ステープン妻石田三隆ノ名義ヲ籍リ同市ニ於テ医業開始ノ件 明治三十一年。
- 73) 日本杏林社編。日本杏林要覧。東京: 日本杏林社; 1909。p.1250 (医師篇)。
- 74) Mary Suganuma. Correspondence. Cleveland Medical and Surgical Reporter 1903; 11(3): 122-124。
- 75) 1885年に荻野吟子が女医としてはじめて医籍に登録された後も、日本において女性が西洋医学を学ぶ機会は限られていた。1900年頃までに女医となった者のほとんどは、済生学舎で学び、医術開業試験に合格した者である。しかし、同校が1900年に女子の入学を停止し、1901年に女子学生を放校したため、1900年に設立された東京女子医学校などが新たに女医養成を担うようになった。ただし、三崎が指摘するように、その後も女子医学教育機関は統廃合がおこなわれ、明治期の女子医学教育はきわめて不安定であった。三崎裕子。明治女医の基礎資料。日本医史学雑誌 2008; 54(3): 281-292。
- 76) AR-PC 1886; 49: 146。
- 77) Sarah K. Cummings. So Much To Be Done. WWW 1884; 14: 82-83。
- 78) Root. Missionary Workers. p.145-146。
- 79) AR-PC 1893: 139。福音新報 1892; 85: 4。
- 80) AR-PC 1894: 175-176。
- 81) AR-PC 1896: 152。
- 82) アデリン・D・H・ケルシー医師の報告 (3)。横浜共立学園資料集。p.206-207。
- 83) 須藤・阿部については、保村。明治期にアメリカへ渡った本県出身の女性医師、広瀬寿秀。須藤かく。津軽人物グラフィティ。弘前: 北方新社; 2015。p.12-22を参照せよ。
- 84) 横浜婦人慈善会病院については、内田和秀。横浜山手病院について13。解説編: 横浜婦人慈善会病院の沿革。聖マリアンナ医科大学雑誌 2014; 42: 173-176を参照せよ。なお、1892年3月に設立されて以来、同院では菱川ヤスが医員として働いていたが、カミングスが京都で医療宣教をおこなうことになったた

- め、カミングスとの約束を優先し、同年9月に同院を辞し、京都へ移っている。福音新報 1892；79：3。
- 85) Missionaries' Ill-fortune. *New York Times*. June 12, 1900: 1.
- 86) *Missionary Intelligencer* 1897; 10(11): 250.
- 87) 聖書之道. 1905; 81: 10. p. 79–80 ; *Nursing News and Announcements*. *American Journal of Nursing* 1919; 19(7): 571.
- 88) Edith Wilds. *Business Women of New Japan: A Few Examples Typical of the Success of Women Pioneers of Various Callings*. *Trans-Pacific* 1921; 5(3): 89–90.
- 89) 井上については、秋山龍三. *日本女医史*. 東京：日本女医会本部；1962. p. 189–191 を参照せよ.
- 90) Mrs. J. B. Porter. *From Our Missionary Letters*. *WWW* 1885; 15(9): 305–306.
- 91) Dr. Suganuma. *Report on Kwassui Dispensary*. *Annual Report West Japan Women's Conference* 1913: 62.
- 92) Mary A. Suganuma. *Correspondence*. *Journal of the American Institute of Homœopathy* 1911; 4: 790–791.

The History of American Female Medical Missionaries in Late 19th-Century Japan

Hiro FUJIMOTO

Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo

In 1859, American Protestant missions started sending medical missionaries to Japan to spread Christianity through medical care. Whereas only male medical missionaries were active in the 1860s–70s, female medical missionaries became engaged in medical work in the 1880s–90s. Historians have argued that these female physicians failed to influence the Japanese since other missionaries disapproved of their medical work and the country already had many native physicians. This paper reexamines their activity by looking at all female medical missionaries who came to Japan during this period. Some worked in mission schools as school doctors, while others opened dispensaries with the support of Japanese doctors or assistants.

Key words: medical missionary, female physician, mission school, female medical education